

# 消滅への関心——孤独——人間の限界

“Robert Frost の抒情詩の特質”

岩 山 太 次 郎

Robert Frost (1874—1963)の多くの詩は、“nature poetry”（自然詩）であるとよく言われる。確かに Frost の詩には自然の風物——畠や牧場、鳥や花や草木——或は耕作に関係した動作やリズムを描いたものが数多くある。しかし、自然や自然の美しさのみが詩の対象として描かれているものは殆んどないと言えよう。彼の詩には、他の詩人の自然詩にはみられないような Frost 独特のタッチがあり、いつも自然と人間が並列にされて描かれている。この意味では、Frost の詩、特に抒情詩は、pastoral（田園詩）と呼んだ方がその本質をよくとらえているようにさえ思える。

この小論の目的は Frost の抒情詩を自然と人間の並列という観点から考察してみることにある。Frost の抒情詩でも、後期のものにはかなり違った要素——宇宙意識というか、神秘的な要素が大きな位置をしめ、それ以前の彼の詩とはかなり違ったものが認められるから、本稿ではそのような後期のものは取扱わずに、1913年に出版された最初の詩集 *A Boy's Will* から *North of Boston* (1914), *Mountain Interval* (1916), *New Hampshire* (1923), *West-Running Brook* (1928), 更には、*A Further Range* (1936) あたりまでの抒情詩を中心に、自然と人間の並列という点からみとめられる特徴を考えてみたい。

詩に自然と人間が並列されているということは、一つの作品の中において、その作品の focus 或は point of view が自然だけであるとか、人間

だけであるといった単一のものでなく、自然と人間の両面にあったり、或は自然と人間の両面からの *points of view* が一緒に存在することである。換言すれば、知覚するものから知覚されるものへ、或は知覚された対象からそれを知覚するものへと *focus* が移動することであり、主体から客体へ、或は客体から主体へと *focus* が移動することである。このような *focus* 或は *point of view* の移動によって、描かれる情景や対象となる動物、植物が観察者と対決するのである。しかし、これらの両者が対決する場合、観察者がややもすれば持つようなセンチメンタルなものや、或は、対象に対して自己を卑下するような感情とか、反対に、対象よりも自己が優っているというような感情は Frost の詩には現われていない。対象である自然だけを問題にするためでも、或はそれを観察する人間だけを問題にするのではない。即ち一方のみに重点を置くために両者が提示されるのではなく、必ず両者が問題にされ、*focus* が移動することにより、自然と人間という二つのものの合一感がより強く打ち出されているのである。

このことは、最初の詩集 *A Boy's Will* にすでに現われている。例えば、“*Mowing*” という詩に於ては、草刈り鎌のささやきだけが独立しているように一見みえるが、そこにはそれをじっと見詰めている人間が存在している。同じようなことは“*Tree at My Window*” (*West-Running Brook*) についても言えるし、“*Two Look at Two*” (*Hew Hampshire*) についても言える。

この“*Two Look at Two*”では、森に住む雄鹿と雌鹿がいかに美しく描かれているが、我々は最後の5行の意味を読みすぎしてはならない。そこにこの詩の真意が示されているのである。森の中の崩れた塀越しに二頭の鹿は自分たちを見詰めている二人の恋人たちの目に見いる：

Two had seen two, whichever side you spoke from.

‘This *must* be all.’ It was all. Still they stood,

A great wave from it going over them,

As if the earth in one unlooked-for favor  
Had made them certain earth returned their love.

(II. 38-42)<sup>2)</sup>

二頭の鹿は二人の人間を見詰めているし、同時にそれらの二人の人間はそれら二頭の鹿を見つめているのである。動物は動物として存在し、人間は人間として存在しているのであるが、二つの *points of view* が同時に存在することにより、たとえ瞬間的であるにせよ、両者の間にあった塀は透明になり、二つの不連続な世界は融合する。

自然をとりあつかったものが Frost の詩には多いが、これらの例からもその一端が分かるように、その真の目的は自然だけにあるのではなく、常に自然と人間にあると言えよう。

ところが、この自然と人間との対比がなされている抒情詩で、その自然は誰の目にもとまる美しい自然とか、或は反対に恐怖にみちたような自然ではない。

Frost がその *Complete Poems* の序としている “The Figure A Poem Makes” というエッセイの中で、彼は詩の本質は人が自分で知っていながら気づかずにいるものを思い起させるところにあると言っている：

No tears in the writer, no tears in the reader. No surprise for the writer, no surprise for the reader. For me the initial delight is in the surprise of remembering something I didn't know I knew. I am in a place, in a situation, as if I had materialized from cloud or risen out of the ground. There is a glad recognition of the long lost and the rest follows. Step by step the wonder of unexpected supply keeps growing.<sup>3)</sup>

詩人の目は自然に向けられていても、それは誰もが気づいているような生き生きとした自然、生命のあふれる自然、誰の目にも必ずとまるような自然に向けられているよりは、見過されているもの、仲間にはぐれたもの

や、棄てられたもの、人目につかないものに向けられている。このような Frost の自然に対する態度を extinction への関心と呼びたい。

*A Boy's Will* には、生命がなくなろうとする自然、生命がなくなった自然に詩人の目が注がれている詩がいくつかある。例えば、他の世界ではどうであろうとも、我々の世界では新しいものが生れる前に、古い木の葉は死んで落ちて行かねばならないのが習であるという “In Hardwood Groves” がそうであるし、明日にでも十月の風が吹けば、木の葉がすべて散ってしまう、霜で紅葉した葉が少しでも長くあればよいと願う “October” もそうであろうし、蝶も死んだし、それをとりまいていた色々のものも死んだという “My Butterfly” もそうであろう。

このような詩人の眼差は、*A Boy's Will* 以外の詩集にも数多くおさまられている。“Mending Wall” (*North of Boston*) もその一つである。Frost はこの詩ではこんなものに目を向けている：

The gaps I mean,  
No one has seen them made or heard them made,  
But at spring mending-time we find them there.

(ll. 9-11)

ところが、このように人目につかないもの、生命のないもの、生命を失いつつあるものに目を向けるだけであれば、Frost 特有のものとしてとりたてて論ずるほどのものでない。Frost の特長は、そういうものの中に、或はそういうものを通して人間の生を感じるとか、或は人間の望みを見出しているところにある。

*A Boy's Will* に収められている “Ghost House” という詩では、何年も昔に消えさり、今は地下倉の壁だけが残った淋しい家に speaker は妙に痛む心を抱いて住んでいる。あたりは夜鷹も飛んでいるところであるが、speaker は地下倉のすみに生えている紫色の野苺を見つけ、そして、外にある低い木の下にある二人の人の名を刻んだ墓石に目を向ける。名を刻ま

れた二人の人が楽しい友として、いかに多くのものを眺めてきたかと想像する。詩人は最後の stanza にはっきりと死んだものの中にいまだ生きているもの、しかも楽しく生きているものを見出している：

They are tireless folk, but slow and sad,  
 Though two, close-keeping, are lass and lad, —  
     With none among them that ever sings,  
 And yet, in view of how many things,  
 As sweet companions as might be had.

(St. 6)

同じ *A Boy's Will* にある sonnet “A Dream Pang” では、森の中にひそんで住んでいた speaker のうたう歌は散った木の葉にまぎれているが、彼は自分のところへ愛人が訪れる夢を見る。夢のあとに残るのは、快い苦痛であって、自分は一人淋しく住んでいるのではない、森は目覚めている、又、その証拠として、あなたはここにいると思う：

But 'tis not true that thus I dwelt aloof,  
 For the wood wakes, and you are here for proof.

(ll. 13-14)

“Reluctance” (*A Boy's Will* の最後の詩) では、speaker は野原や森を通りぬけ、石垣を越え、丘をのぼり、下界の展望を楽しんで、街道ぞいに家へ帰ろうとしている。あたりは冬になろうとしている。その時、speaker の目に入るのは、他のものが眠っているときに地に落ちた枯葉であり、雪が積ってから櫛に残っている葉が風に音をたてるだろうと想像する、落葉はかたかくたまりあっているし、最後まで残っていた一輪の野菊も消え、witch-hazel の花もしなびている。そんな中にも、詩人の心はまだ何かを求めてやまず、足は「何処へ行くのか」とたずねる：

The leaves are all dead on the ground,  
 Save those that the oak is keeping

To ravel them one by one  
 And let them go scraping and creeping  
 Out over the crusted snow,  
 When others are sleeping.

And the dead leaves lie huddled and still,  
 No longer blown hither and thither;  
 The last lone aster is gone;  
 The flowers of the witch-hazel wither;  
 The heart is still aching to seek,  
 But the feet question 'Whither?'

(Sts. 2 &amp; 3)

このように生命のなくなる自然に目を向ける詩人は、生命のなくなる自然とは反対に、そこで生を求めている人間の姿を描いているのである。

*North of Boston* の “The Wood-Pile” でも、凍りついた湿地で見つけた、きちんと切って積み重ねてある薪の山を見詰める speaker は、

The wood was gray and the bark warping off it  
 And the pile somewhat sunken.

(ll. 29-30)

というような目にとまりがたいようなところに目を向けている。そして最後に、暖炉からこんなに遠く離れたところに薪が置かれているのは「腐蝕のゆっくりした煙のたたぬ燃焼によって、凍った湿地をできるだけ温めようとしたものだろう」と想像する：

He spent himself, the labor of his ax,  
 And leave it there far from a useful fireplace  
 To warm the frozen swamp as best it could  
 With the slow smokeless burning of decay.

## (II. 37-40)

人気のない自然の風物に目を向けながらも、そこにいない人間の存在、人間の生活を感じとっているのである。実際には薪は暖炉では燃されないであろうが、より大きな観点からすれば、“smokeless burning of decay”によって“frozen swamp”を暖めるということによりその目的を果しているのである。ここに詩人はそこに存在しない人間の生活を感じとっているのと同時に、外観に於ては消滅してゆくものの中に、ある生きた活動を認めているのである。

“Ghost House”や“Reluctance”更には“The Wood-Pile”に於ては、Frost が extinct したもののの中に存在する生を感じとっているのを見ることが出来た。しかし、Frost の抒情詩の中には、このようなものを更に押し進めたとも言うべきもの、即ち、extinct したもの、extinct するものの中に、人間の生活とか生とか以上のもの、永遠の生につながるようなものを詩人が只管求める姿を見ることが出来るものもある。

例えば、“Spring Pools” (*West-Running Brook*) では、やがてなくなるであろう水溜だけを問題にしているのではない。そこには木の根がその水を吸いとることともに更にはそれ以上のことをも問題にしているのである。詩の冒頭の二行にまず水溜が提示される：

These pools that, though in forests, still reflect  
The total sky almost without defect,

## (II. 1-2)

この水溜は空全体を映すものであり、それは凝縮された空なのである。確にそれらの水溜は花のように消え去るものである。又、花は水溜のように死んでゆくものである。しかし、その水は、木の根により吸い上げられ、水も花も木に吸い上げられることによって“dark foliage” (l. 6) になるのである。従って水に映る空も暗闇になり、蕾が森を暗くし、自然を暗くする。その意味に於て、木は森の地面にあるあらゆるものを吸収する力を

その蕾の中に所有しているのである。水溜の水そのものも昨日の雪がとけたものであるということは、それが自然の法則の中にある連続性の中にあるということである：

Let them [i. e., trees] think twice before they use their powers  
 To blot out and drink up and sweep away  
 These flowery waters and these watery flowers  
 From snow that melted only yesterday.

(St. 2, ll. 3-6)

このように “Spring Pools” には自然の中に存在する永遠の法則を見詰めている詩人の姿がある。

同様のことは詩集 *New Hampshire* にある “A Star in a Stone-Boat” についても言えよう。石を運ぶ櫓で運んできた石をもって石垣を修理する百姓は、燃えつきた「星」の溶けた塊を手にして、その中に地上をはるか離れたところに働く創造力を感じとり、その塊の石に不滅の環を発見している。後期の作品ではあるが、*A Witness Tree* の “Come In” を例にとっても、よく言われるように *thrush* は詩人の魂の中にある歌の精神を、*woods* は物質的な世界を、そして、*stars* は不滅のものを表わしていよう。この詩では *speaker* が夕闇のせまる頃森のそばへ来ると *thrush* の囀りを聞く。森の中は夜のような暗さであるが、その暗闇の中へ入れ、そして、嘆けと呼びかけているように *thrush* の囀りが聞える。しかし *speaker* は

But no, I was out for stars:  
 I would not come in.  
 I meant not even if asked,  
 And I hadn't been.

(St. 5)

と思う。ここで特に問題にしたいのは、この詩の真中の第3 stanza である：



The last of the light of the sun  
 That had died in the west  
 Still lived for one song more  
 In a thrush's breast.

(St. 3)

ここには滅びるものに対する拒絶と永遠へのあこがれを認めることが出来るよう。

このように生命のない自然、或はなくなろうとする自然、即ち自然の中にみられる extinction を対象としても、そこには間接的にしか存在しない人間を巧みに直接的に感じさせるような詩や、或は不滅の信念を抱いて、生或は永遠へのあこがれを描いている詩を書いている。

次に何故 Frost がそのように自然の中にみられる extinction、或は自然の extinction に目を向けるのかを考えてみなければならない。まず第一に“Desert Places” (*A Further Range*) を考察しよう。

Snow falling and night falling fast, oh, fast  
 In a field I look into going past,  
 And the ground almost covered smooth in snow,  
 But a few weeds and stubble showing last.

The woods around it have it—it is theirs.  
 All animals are smothered in their lairs.  
 I am too absent-spirited to count;  
 The loneliness includes me unawares.

And lonely as it is that loneliness  
 Will be more lonely ere it will be less—  
 A blanker whiteness of benighted snow

With no expression, nothing to express.

They cannot scare me with their empty spaces

Between stars—on stars where no human race is.

I have it in me so much nearer home

To scare myself with my own desert places.

これが詩の全文である。この詩は雪におおわれた自然の描写から始まる。その自然においてなお存在している生は二三本の草と切株だけなのである。そこに住む動物すらも巣や穴にとじこめられているし、speaker は物を考える気力がないと言う。この第2 stanza は、speaker と雪におおわれている“empty ... field” との間にある関係を提示している。desolation 中の、雪におおわれた野はその人間の孤独の symbol であろう。しかし、この詩はそれだけで終わっているのではない。確に *Understanding Poetry* の著者が言うように<sup>4)</sup>、もしこの詩が第3 stanza で終わってれば、普通の“nature poetry”になってしまうであろうが、最後の stanza で新しい要素が加えられることによって、この詩は違ったものになっている。新しく加えられるものは、speaker 自身の自己の分折であり、自己の statement である。この speaker は人間の経験にある extinction 或は desolation を知っている人間であり、自然の単なる desolation には驚きもしないし、気をふさがれることもない。外界の孤独をその中で感じるだけでも、外界からの絶望を感じるだけでもない。人間はそのような自然の“desert place”に圧倒されるものではない。彼はこれをよく知っている。精神の孤独は外界の自然の孤独よりも強いことを知っているのである。第4 stanza にはこのような要素が入っているのである：

They cannot scare me with their empty spaces

Between stars—on stars where no human race is.

I have it in me so much nearer home

To scare myself with my own desert places.

より大きい精神の孤独もこの詩人をして、子供のように恐しさに身を怯ませることは出来ない。彼は自己以外の extinct した世界の孤独の中に、更には、自己の精神の孤独の中であって、その中から何か力を見出しているのである。このような意味に於て、Frost は孤独と常に対決しなければならなかったのである。

最初の詩集 *A Boy's Will* 以後、孤独のシーンが現われる詩は数多くある。Frost はそういう詩に於て、孤独の中から何かを求めようとしている。

*A Boy's Will* に “Pan with Us” という詩がある。森から出てきた Pan が静かな丘の上に立って笛を吹く。その音は bluejay の叫び声や hawk のなき声にひとしく素朴なものであるが、時代は変じていてこういう笛の音には最早力はなく、新しい価値がそれに代っていると Pan は嘆く：

They were pipes of pagan mirth,  
 And the world had found new terms of worth.  
 He laid him down on the sun-burned earth  
 And raveled a flower and looked away—  
 Play? Play?—What should he play?

(last st.)

これは、新しい芸術とか、新しい詩とか、色々と解釈出来よう。ともかく、孤独を感じるの中にあっても生きる喜びを自然の中に見出してそれを歌おうとするのである。

又、*Mountain Interval* にある “Birches” では、speaker は  
 It's when I'm weary of considerations,  
 And life is too much like a pathless wood

(ll. 43-44)

と言うように無気力による孤独感を持つ時に於てすら、birch によじのぼり、また地上に降りるまで木の梢を揺さぶり続ける一人の少年のイメージ

をつかって、天国に上りたいと願いながらも、やはり地上へまい戻りたいという人間の生きる欲求を力強く表現している：

I'd like to get away from earth awhile  
And then come back to it and begin over.

(ll. 48-49)

“Stopping by Woods on a Snowy Evening” (*New Hampshire*) には孤独な無言の静けさがある<sup>5)</sup>：

My little horse must think it queer  
To stop without a farmhouse near  
Between the woods and frozen lake  
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake  
To ask if there is some mistake.  
The only other sound's the sweep  
Of easy wind and downy flake.

(Sts. 2 & 3)

しかし、この孤独さは上の stanza にすぐ続く最後の stanza によって高揚される：

The woods are lovely, dark and deep,  
But I have promises to keep,  
And miles to go before I sleep,  
And miles to go before I sleep.

(St. 4)

Speaker は心に痛ましくも “The woods are lovely, dark and deep” と認めるが、しかし、自分が何かに打ち負けそうになる時に恐らく言うであろう句 “miles to go before I sleep” を繰返し述べることによって、彼

はただ単に孤独にひたっていることから自己を現実にも引きもどして、自分が“promises to keep”をもっていることを確認させているのである。夢みる詩人は現実の問題に解答を与える詩人哲学者に変貌するのである。その解答は他に対する自己の義務を具象化するだけでなく、自分自身の精神的な問題にも解答となるものである。

何かを通して生への力となる孤独は、上にあげたような場合のもの他に、“An Old Man’s Winter Night” (*Mountain Interval*) にみられるように、老年のものがもつ不可避性という要素、また、“Lost in Heaven” (*A Further Range*) のように形而上学的な世界における詩人の立場という答え難いような問題、“Acquainted With the Night” (*West-Running Brook*) のように不思議な暗い世界におけるもの、“Build Soil—A Political Pastoral” (*A Further Range*) のように、自然の中ではないが、社会に対する嫌悪などの問題を通して表わされている。

いずれにせよ Frost の中に描いている孤独は、詩人がその中から、或はその孤独を通して何らかの形でより大きな力を見出そうとしたり、見出したりしているものであることは否定出来ない。しかし、その力には我々は常に限界のあることを感じる。今迄見てきた詩からもわかるように、Frost が見出したところの力は、孤独を抜けることは出来たが、それ以上の力は存在しないというような力強い、逞しいものではなかった。この孤独な人間と自然の関係から生ずる力には共通点がある。それを Frost の抒情詩の第三の特長として考察したい。

*West-Running Brook* にある“On Going Unnoticed”や“The Last Mowing”には、一個の人間は広大な魅力ある宇宙の中では卑小で、宇宙や自然に絶対に打ち勝てるというような力をもたないものであるという考えが出て<sup>6)</sup>いる：

As vain to raise a voice as a sigh  
In the tumult of free leaves on high.

What are you in the shadow of trees  
Engaged up there with the light and breeze?

(“On Going Unnoticed,” st. 1)

The place for the moment is ours  
For you, oh tumultuous flowers,  
To go to waste and go wild in,  
All shapes and colors of flowers,  
I needn't call you by name.

(“The Last Mowing,” ll. 15-19)

“The Most of It” (*A Witness Tree*) では Frost は自然と人間に対して次のような考えを示している：

He thought he kept the universe alone;  
For all the voice in answer he could wake  
Was but the mocking echo of his own  
From some tree-hidden cliff across the lake.  
Some morning from the boulder-broken beach  
He would cry out on life, that what it wants  
Is not its own love back in copy speech,  
But counter-love, original response.  
And nothing ever came of what he cried....

(ll. 1-9)

Speaker はこのように「人生」に向って大声で呼びかけた。彼は愛に対する愛として、誰か人間が現われるかと期待して呼んだのである。しかし、返ってきたのは自分の声の木霊だけで、人間は誰も出てこなかった。出てきたのは新しく加わった同類の人間としてではなくて、巨大な雄鹿であったのである：

Instead of proving human when it neared

And someone else additional to him,  
As a great buck it powerfully appeared...

(ll. 14-16)

このように Frost は広大な恐しい自然、冷淡な自然に瞬間的な洞察をするが、人間がそれに絶対に勝るとは思っていない。後期の *Steeple Bush* にある “Directive” でも、生は pathetic なものであり、黙従しなければならぬ悲惨さがあると感じている。

Frost によれば、人間は自然の、又、宇宙の栄光でも、不可解なものでも、もの笑いの種でもなく、自然の habit にしかすぎない存在であり、遊星の軌道のあとにそって、重苦しく歩む存在なのである。

ここで重要なことは、Frost は自然に於ける process と人間に於ける process とを対比の形で提示し、決して一方のみを肯定するような態度をとらないことである。このことは “The Wood-Pile” にある薪についても言えよう。深い森の中で見事に積み立てられている薪の推積が朽ちるままに忘れられて残されているのは、人間のなす業の浪費性のみを表わすものであるかのようにもとれるが、詩人はあらゆるエネルギーは、それが人間ののものであっても、或は、朽ちてゆく薪のものであっても、それらすべては同等であると言っているのである：

I thought that only  
Someone who lived in turning to fresh tasks  
Could so forget his handiwork on which  
He spent himself, the labor of his ax,  
And leave it there far from a useful fireplace  
To warm the frozen swamp as best it could  
With the slow smokeless burning of decay.

(ll. 34-40)

自然と人間、或は、自然と人間のすることや作るものなどの二つの pro-

cess の対比の中に両者をそれぞれある程度まで肯定することによって見出すものを Frost は人間と人間との関係の中にも見出している。例えば、“Mending Wall”の中に出てくる人物は、ただ自分一人になるという価値が親しい交友を求める願いと並行してあることを知る。ここで詩人は隣人の“Good fences make good neighbors.”といった個人的な態度に対して、“Something there is that doesn't love a wall.”とあって、生として相対立する概念を控え目に目立たないように織込んで並べている。

従って Frost の抒情詩には一般に、自然に対しても、人間に対しても、非常に力強い直接的な肯定の態度はみられない。最初に述べた自然と人間の並列ということと同じように、二つの対比のなかに暗示するような形で表わされている。“Build Soil—A Political Pastoral.”にみられるような、

There is no love.

There's only love of men and women, love  
Of children, love of friends, of men, of God,  
Divine love, human love, parental love,  
Roughly discriminated for the rough.

(II. 84-88)

という言葉にしても、すぐ後に、

Poetry, itself once more, is back in love.

(I. 89)

という表現があるように、具体的な人間的な愛はあっても、そのみがといたようなものではない。又、“Fire and Ice” (*New Hampshire*) に於ける火と氷という大きな対立を媒介として、愛と憎しみ、ひいては感情と理性、夢と合理性、理想と現実の対立を想起させる詩人のもっている人間への信頼も、或は、先にあげた“Mending Wall”にみられる人間への信頼も、自然の豊さと人間の努力というような対比の形で出るものであり、滅びゆくものの中に見出す生命やその欲びと恐れ、それになおも抵抗し



ようとする力として出されたものであって、自然のためでもあり、人間のためでもあるという弱さをもった限界を孕んでいる。

相対立するものの一方のみを肯定する態度も、自然界には悪意が根をはっていると考えてその証拠となるものを細く吟味する態度もとらない Frost は、Whitman のように人間性を謳歌するような力強い逞しさをもっていない。又、これはよく言われることであるが、<sup>7)</sup>T. S. Eliot の“Gerontion”にみるような切羽詰った限界状況での絶望の意識を Frost の提示する二つの相対立するものの中に感じることも出来ない。W. B. Yeats の“Sailing to Byzantium”のように絶望の世界から生の世界を求めるといような痛痛しさを Frost の抒情詩に読みとることも出来ない。Frost の初期から中期にかけての抒情詩に描かれている力には、こういう意味での限界がある。

——これは第二回日本アメリカ文学会全国大会（1963年10月26日、於早稲田大学）のシンポジウム「ロバート・フロストの詩に於ける自然と人間」に於ける発表を一部修正したものである——

#### 註

- 1) John Lynen: *The Pastoral Art of Robert Frost*, New Haven, Yale University Press, 1960, p. xi.
- 2) 以下 Robert Frost の詩の引用は、*Complete Poems of Robert Frost*, New York, Holt, Rinehart & Winston, c. 1962. による。
- 3) *Ibid.*, p. vi.
- 4) Cleanth Brooks & Robert Penn Warren, eds.: *Understanding Poetry*, 3rd edition, New York, Holt, Rinehart & Winston, 1960, p. 105.
- 5) この詩はすでに何人もの批評家により詳細に論じられてきた有名な詩で、それらの批評家の中には、Reginald L. Cook, Lawrance Thompson, René Wellek と Austin Warren, Leonard Unger と William van O'Connor, John Ciardi 等がある。cf. Robert A. Greenberg & James G. Hepburn, eds.: *Robert Frost, An Introduction*, New York, Holt, Rinehart & Winston, 1961, pp. 11-30.
- 6) Yvor Winters: “Robert Frost, or the Spiritual Drifter as Poet,” *On Modern Poets*, New York, Meridian Books, 1959, pp. 211-212.

- 7) Cf. John F. Lynen: *op. cit.*, pp. 162-190; George W. Nitchie: *Human Values in the Poetry of Robert Frost*, Durham, N. C., Duke University Press, 1960, pp. 202-223; etc.